

平成21年 4月30日現在

研究種目：若手研究(B)  
 研究期間：2007～2008  
 課題番号：19730428  
 研究課題名(和文) 産後うつ病の家族へのコミュニティでの援助に関する  
 臨床心理学的介入研究  
 研究課題名(英文) Community support for postnatal depression mothers and their family  
 研究代表者  
 金子 一史 (KANEKO Hitoshi)  
 名古屋大学・発達心理精神科学教育研究センター・准教授  
 研究者番号：80345876

## 研究成果の概要：

3ヵ月児健診において、産後抑うつと母親から乳児に対する愛着に関する調査を行った。その結果、抑うつと愛着には、中程度の関連が認められた。高得点者となった母親に対しては、その場で問診を行った。問診の結果支援が必要と判断された場合は、経過をフォローした。また、ケース処遇会議を毎月開催した。通常の乳幼児健診における産後うつ病への介入システムを考案し、愛知県内の自治体にて実際に実施した。これらにより、地域住民の健康増進に貢献することができた。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	0	1,200,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	2,200,000	300,000	2,500,000

研究分野：臨床心理学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：産後うつ病，産後うつ病自己評価票（EPDS），産後母親愛着，3ヵ月児健診

## 1. 研究開始当初の背景

近年、児童虐待などの親子関係の障害が社会的な問題となっており、その対応が緊急の課題として要請されている。児童虐待の要因は様々であるが、繰り返し指摘されている要因の一つに、両親のメンタルヘルスが挙げられている。

「産後の肥立ちがわるい」という言葉があるように、出産後の産褥期は、女性のメンタルヘルス上、ハイリスクの時期であることが良く知られている。産褥期は、ホルモンバランスの急激な変化などの身体の変化に加えて、夜間の2～3時間おきの授乳による睡眠

不足と体力の消耗などから、母親は精神的に不安定になりやすい。なかでも比較的発症率が高いのは、うつ病である。産褥期の母親の、およそ15%に産後うつ病が認められる(O' Hara, et al, 1984; Stein 1980; Yamashita et al, 2000)。母親が抑うつのである乳児は、母親との相互作用において関わりが少ない(Righetti-Veltma et al, 2003)という報告や、産後うつ病であった母親の子どもは、児童期において認知機能が有意に劣る(Caplan et al, 1989)といった報告があり、子どもの発達においてリスクとなることが指摘されている。加えて、うつ病による自責

感から母子心中や嬰兒殺しへとつながる可能性があり(吉田, 2006), 子どもの健全な発達を促進する上でも, 非常に重要な問題である。しかし, これらの母親が実際に精神科などのメンタルヘルスの専門機関にかかる受診率は, かなり低いことが知られている。精神的に不安定で子どもを抱えたまま, 治療的な援助を受けずに生活している人が, コミュニティーには数多く存在する。これらの家族に対して, いかに効果的な介入を行うかについては, 緊急の課題となっている。

産後うつ病の早期発見を目指して, 全国の自治体実施している事業に「こんにちは赤ちゃん訪問」がある。これは, 厚生労働省の次世代育成支援対策交付金によって, 生後4ヶ月までの乳児の全家庭を訪問する事業である。ところが, 早期発見した産後うつ病の養育者に対して, 地域社会でどのように援助すればよいのかについては, 具体的には明らかになっていない。

加えて, 産後うつ病ではないのに子どもに愛情を感じられない母親も, 地域社会には多数存在している。これらは, 産後愛着障害(Brockington, 1989; 2001)として検討されている。ところが, 現在の早期発見システムは産後うつ病に重点がおかれているため, 産後愛着障害については見落とされやすい。産後愛着障害は, より重篤な場合にネグレクト等の児童虐待へとつながりやすいことから, 早期発見および早期介入が必要である。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は, 産後うつ病の早期発見及び早期介入システムを検討することであった。3ヶ月児健診において, 質問紙調査を行い, 早期発見に向けたデータの収集を行った。また, 高得点者への支援のあり方に関して, 保健センター職員と連携を取り, 望ましいサポートシステムを検討することであった。

## 3. 研究の方法

愛知県内のある自治体(人口約7万4千人, 年間出生数約700)において, 3ヶ月児健診において質問紙調査を実施した。最終的には約700名の協力を得たが, ここではそのうちの295名分のデータについて報告する。

母親の平均年齢は29.6歳であった。18歳から49歳まで分布していた。乳児の性別は, 男子が52.7%, 女子が47.3%であった。在胎週数は, 平均38.9週であった。平均出生体重は, 3003グラムであった。出生日数は, 生後120.4日であった。乳児の出生順位は, 第1子が45.3%, 第2子が37.2%, 第3子が14.4%, 第4子が3.2%であった。45.9%の母親は, 妊娠前に仕事をしていた。帝王切開での出産は, 15.9%, 吸引分娩は7.8%であった。母乳栄養は60.2%, ミルクは20.1%, 混合栄養は18.7%

であった。

シングルマザーは0.7%, 核家族が82.7%であった。父親の平均年齢は31.5歳であった。多胎と外国人は分析から除外した。

使用尺度は, エジンバラ産後うつ病自己評価票(EPDS)を使用した。乳児への愛着を測定する尺度として, 産後愛着尺度(Postpartum Bonding Questionnaire(PBQ))を使用した。EPDSは, 10項目, PBQは25項目である。

## 4. 研究成果

### (1) 質問紙調査について

EPDSの平均は, 3.04点(標準偏差3.6)であった。EPDSのカットオフポイントは8/9である。EPDS陽性となった者は, 7.6%であった。EPDS得点の分布をFigure1に示す。

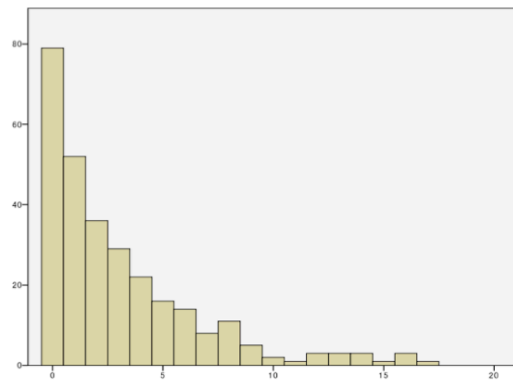
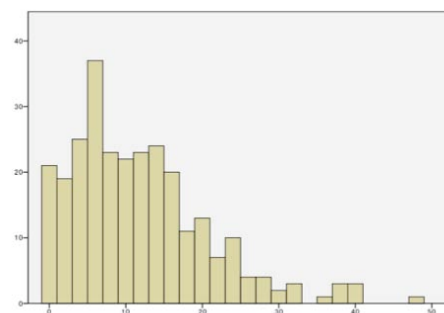


Figure 1 EPDS得点の分布

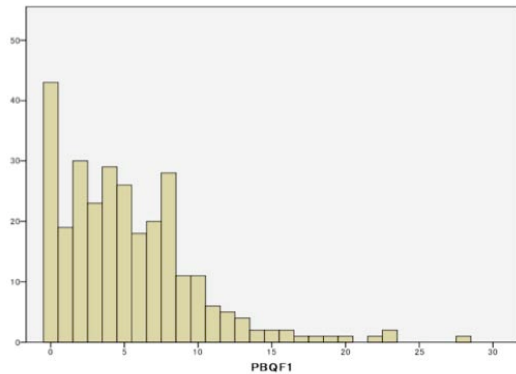
EPDSと社会的属性との関連を検討したところ, 母親との年齢( $r=.13$ ), 出生体重( $r=-.15$ ), 出生順位(第1子=4.0, 第2子以上=2.4)栄養方法(ミルク=3.9, 母乳=2.6), 出産異常(あり=4.0, なし=2.6)において, 関連が認められた。しかし, いずれも弱い関連であった。

PBQについては, 信頼性の検討を行った。25項目でのクロンバックのアルファ係数は.84で, 十分な値が得られた。第1因子は.76, 第2因子は.66, 第3因子は.52, 第4因子は.48であった。

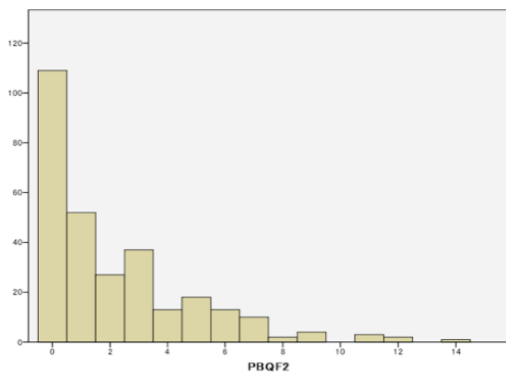
25項目によるPBQ得点は, 平均11.3であった。区分点26以上を示した者は, 6.9%であった。区分点40以上を示した者は, 0.7%であった。全項目での分布を以下に示す。



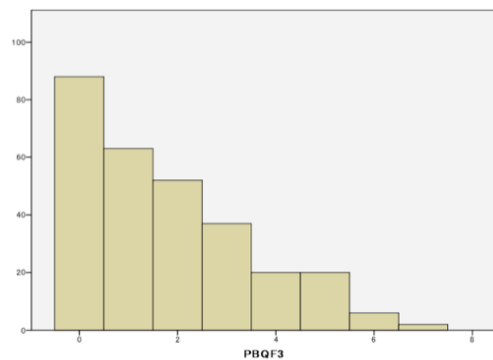
第1因子(全体的因子)12項目の平均は、5.3であった。区分点12点以上を示した者は、8%であった。第1因子の分布を以下に示す。



第2因子(拒否及び怒り)の平均は2.2であった。区分点13点以上を示した者は、0.3%であった。第2因子の分布を以下に示す。



第3因子(乳児に対する不安)の平均は1.8であった。区分点10点以上の得点を示した者はいなかった。第3因子の分布を以下に示す。

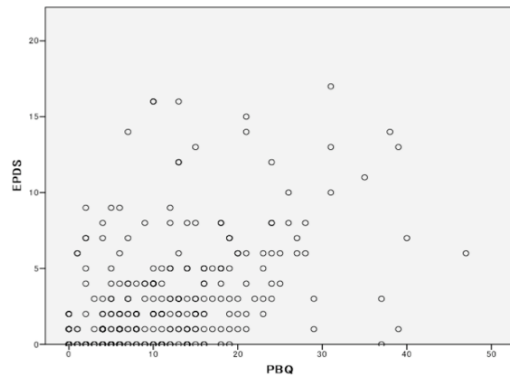


4因子(虐待のリスク)の平均は0.06であった。区分点2点以上を示した者は、1.4%であった。

PBQと社会的属性との関連を検討したところ、乳児の性別(男子=12.5, 女子=10.0), 出生順位(第1子=13.7, 第2子以上=9.3), 第3因子において母親の就労形態(仕事あり=2.1, 専業主婦=1.5), 第3因子において出産異常(あり=2.2, なし=1.6)に関連が

認められた。しかし、いずれも弱い関連であった。

EPDS得点とPBQ得点の相関を算出したところ、 $r=.44$ と中程度の関連が認められた。散布図を以下に示す。



愛着尺度とEPDSの散布図

PBQの得点については、イギリスの報告に比べて低くなっていた。また、性別や出生順位との間に関連が認められた。これらの結果には、文化差の要因も関連していると思われる。

本研究の限界として、PBQについてはイギリスでの区分点を今回は使用したが、日本における区分点を検討する必要がある。また、臨床診断として、構造化面接などの方法を組み合わせる必要がある。

(2) 保健センター職員との連携に関して  
質問紙調査によって、高得点者と判断された対象者に対しては、保健センター職員による問診を行った。問診によって、支援が必要と判断された対象者に対しては、援助活動を開始した。どのような援助活動が適切であるのかについて、月に1回ケース処遇会議を開催して、共に検討した。ケース処遇会議の結果、継続訪問支援、各種社会資源利用、他機関紹介など、各種の処遇が決定され、またその後の経過を検討した。

このように、ケース処遇会議に臨床心理士として参加することで、保健センター保健師の活動を強力にバックアップすることができると示された。これらにより、効果的に地域住民への介入が行われることが明らかとなった。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

- ① 金子一史・野邑健二・田中伸明・瀬地山葉矢・高橋清子・村瀬聡美・本城秀次 2008  
母親の抑うつと母親から子どもへの愛

着に関する縦断研究-妊娠中期から産後1ヶ月まで- 児童青年精神医学とその近接領域, 49, 497-508. 査読有り

- ② 金子一史 2008 育児不安および育児ストレスに関する最近の研究動向 周産期医学, 38, 591-596. 査読なし
- ③ 金子一史・本城秀次 2007 乳幼児精神医学の最近の動向 臨床精神医学, 36, 547-550. 査読なし
- ④ 金子一史 2007 妊娠と愛着をめぐって ところの科学, 134, 31-36. 査読なし

[学会発表] (計6件)

- ① 二宮諭・和田浩平・福岡明日香・児玉由紀子・大竹加歩子・峰野崇・内海友里・田中伸明・金子一史・本城秀次 2008.11.15. 産後の母から乳児への愛着と乳児の気質的な扱いにくさが産後の抑うつに与える影響について 第18回日本乳幼児医学・心理学会
- ② 和田浩平・田中伸明・福岡明日香・玉木里奈・中原千種・峰野崇・大竹加歩子・二宮諭・児玉由紀子・金子一史・本城秀次 2008.11.15. 妊娠中の母親の抑うつと胎児への愛着が出産後2年目の母親の虐待傾向とボンディングに及ぼす影響について 第18回日本乳幼児医学・心理学会
- ③ Kaneko Hitoshi, Postpartum Bonding and Depressive Symptoms in a Japanese Community Sample. 2008.11.3. WORKSHOP on the POSTPARTUM BONDING QUESTIONNAIRE, University of Heidelberg, Germany.
- ④ 玉木里奈・田中伸明・上嶋菜摘・加藤真里子・野田紗矢香・内海友里・中原千種・村瀬聡美・金子一史・野邑健二・本城秀次

2007.11.17. 父親の胎児愛着の特長-母親の胎児愛着との比較から- 第17回日本乳幼児医学・心理学会

- ⑤ Kaneko Hitoshi, Sechiyama Haya, Sasaki Yasuko, Nomura Kenji, Tanaka Nobuaki, Murase Satomi, Honjo Shuji. The Relationship between attachment representations and depressive symptomatology in pregnant Japanese women. 2007.8.27. European Society for Child and Adolescent Psychiatry 13th International Congress, Florence, Italy.
- ⑥ Kaneko Hitoshi, Nakaya Namiko, Murase Satomi, Honjo Shuji. Impact of depression and fetal attachment on maltreatment and bonding at two years postpartum. 2007.5.13. The XV International Congress of The International Society of Psychosomatic Obstetrics and Gynecology, Symposium: Screening for Mother-Infant Relationship (Bonding) Disorders. Kyoto, Japan.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

金子一史 (KANEKO Hitoshi)  
名古屋大学・発達心理精神科学教育研究センター・准教授  
研究者番号：80345876